

遠い世界・近い世界

経歴

- ▶ ポピュラー音楽研究→本業
- ▶ 雑誌ライター→映画雑誌、音楽雑誌、その他
- ▶ 翻訳・通訳→日本語⇄英語、日本語⇄フランス語。音楽や文学関係の書籍の他、自動車、医療、政治経済など
- ▶ フリペ→一般誌が扱わない日本の情報をフランス語で、フランスの情報を日本語で紹介

留学経験～日本に対する誤解

- ▶ フジヤマ・サムライ・ニンジャ
- ▶ 華道・茶道・禅・ワビサビ
- ▶ 不気味な男性・従順な女性
- ▶ ワーカホリック、エコノミック・アニマル
- ▶ 没個性・集団主義・他人指向

文化的ステレオタイピングと偏見

ステレオタイプ

特定の文化によってあらかじめ類型化され、社会的に共有された固定的な観念ないしイメージのことである。通例、紋切り型態度と訳される。（出典：日本大百科事典）

1. 過度に単純化されている
2. 不確かな情報や客観的根拠の薄弱な知識に基づき誇張され、しばしばゆがめられた粗略な一般化ないしカテゴリー化である
3. 好悪、善悪、正邪、優劣などといった強力な感情を伴っている
4. 人種差別 (racism) や性差別 (sexism) といった偏見に転化しやすい
5. 偏見や誤認・誤解を生むが、同時に、社会的に共有される感情・認知・思考・行動様式を型にはめることで社会の統合と安定にも寄与している
6. 新たな証拠や経験に出会っても、容易に変容しにくい

どこにもない「日本」

- ▶ 両極端な日本のイメージ
 - ▶ 極端に上品か、極端に下品。
 - ▶ 日本人：会うまでは不気味だが、会ってみると普通・面白い
- ▶ マスメディア→中間的な、「凡庸」な日本人のライフスタイルや価値観はほとんど扱われない
 - ▶ なぜか？
 - ▶ 経済的理由：自分たちとの違いを強調した方が、視聴率は取れるし、部数も伸びる
 - ▶ 政治的理由：80年代以来、欧米で日本製品の氾濫を問題視する世論（輸入過多・貿易不均衡）
 - ▶ 文化的理由：自分たち（欧米）の文化が優れており、それ以外を二流・亜流とする価値観

東洋と西洋という世界の分け方

- ▶ テレビニュースの内容分析
 - ▶ ニュースは「世界への窓」のはずなのだが……
 - ▶ 自国と外国で取り上げられるニュースの内容が違う
 - ▶ 西洋→先進的・自由・民主的・理性・文明・洗練・秩序……
 - ▶ 東洋→後進的・束縛・独裁的・感情・自然・野蛮・混沌……
 - ▶ ニュースの国際流通（情報は富裕国で料理され、貧困国にたれ流される）
 - ▶ 第三世界には、各国に特派員を派遣する予算のない報道機関も多く、その殆どが、欧米の通信社（ロイター、AFP、UPI、APなど）経由で外国の出来事を報道している

- ▶ 欧米の価値観や視点を通してしか世界を知り得ないという状況
- ▶ エドワード・サイード (1978=1993) 『オリエンタリズム』平凡社ライブラリー

……しかし、「第三世界」というほど経済的に貧しくはない日本の場合はどうなの？

どこにもない「イギリス」

- ▶ 日本のマスメディアが流布しているイギリスのイメージも、一面的で実際のイギリス社会とは程遠い
- ▶ 紳士／紅茶／パンクス／失業／……

パリ症候群

- ▶ マスメディアの示すパリのイメージに憧れてパリに移り住んだ日本人（特に女性）の中に、うつ病を発症する人が多い
- ▶ いずれも言葉や文化の壁が原因となり、対人恐怖・外出恐怖・被害妄想を経て発症

文化の壁を超えて理解しあうにはなにが必要か

メディア免疫をつける

- ▶ マスメディアの流す情報の背後には、政治的・経済的・文化的な力学が働いている
- ▶ ニュースとしての「非日常的」な価値を追求
- ▶ 自分たちの常識を再確認するための方便
- ▶ 視聴率の獲得＝広告出稿の最大化

必要悪としてのステレオタイプ

- ▶ ステレオタイプや先入観というのは、自分と違う人を理解しようとするときの最初の手がかりとなるものであり、なくてはならないもの
- ▶ ウォルター・リップマン (1922=1987) 『世論1・2』岩波文庫
 - ▶ われわれはたいていの場合、見てから定義しないで、定義してから見る。外界の、大きくて、盛んで、騒がしい混沌状態の中から、すでにわれわれの文化がわれわれのために定義してくれているものを拾い上げる。(pp.111-112)。
 - ▶ ステレオタイプはわれわれの個人的習慣の核ともなり、社会におけるわれわれの地位を保全する防壁ともなっている。(p.130)
 - ▶ ステレオタイプは忙しい生活のなかで時間を節約し、社会におけるわれわれの位置を守る役目を果たすだけでなく、世界を確実に見つめ、その全体を見わたそうとする試みによって生じるあらゆる困惑からわれわれを守ることになるのである。(p.156)
 - ▶ あるステレオタイプの体系がしっかりと定着しているとき、われわれの注意はそうしたステレオタイプを支持するような諸事実にひかれ、それと矛盾するものからは離れる。(p.161)

唯一無二の真実から複数の現実へ

- ▶ あらゆるステレオタイプを超越した「唯一の真実」というものはなく、様々なステレオタイプの周りに複数の「現実」があるだけ
- ▶ 問題なのは、自分の「現実」が偏見や差別につながる可能性に対してあまりにも鈍感で、他の考えに対して心を開かない姿勢

青年よ、あんまり遠くを目指すな（！）

「自分探し」の嘘

- ▶ 自分がどういう人間なのかを知るためのもっとも効率的な方法は、自分をよく知る身近な人々（親・親戚・先生・友達……）に自分のことを聞いて回ることであり、誰も自分を知る人のいない遠くの場所に逃避することではない

エキゾティズムとノスタルジー

- ▶ 「いま・ここ」からの逃避に過ぎないのではないか→「隣の芝生は青い」
- ▶ 自己実現のために本当に必要なことは、「いま・ここ」で自分の足に絡み付いている複雑な問題を、どのようにして解決するか、その方法を自分の手で見出し、自分の力で歩き出すことなんじゃないか？